

特別養護老人ホーム 樹の里

竣工にあたり

社会福祉法人 特別養護老人ホーム 樹の里
理事長 木野村 好己氏

激動する時代だからこそ挑戦

「維持現状即是落伍。何もしなければ変わらないだけではすまない。それは遅れていくことを意味する」。

時代は刻一刻と変化しつつ流れている。そこでは新しいことに挑戦していくことが安全であり、挑戦しないことは危険という。「激変する現在の経済社会はかつてない絶好のチャンスだ。その変化に対応して先頭を走っていくのが経営者」とその役割を強調された。

経営者は、見えない将来を予測し、戦略を立てて突き進んでいかなくてはならない。そのためには貪欲さと思いつきの良さが必要であり、危険と感じたらすぐに撤退することも大切、と経営判断の重要性を語られた。

また経営には「売れ筋の発見が必要不可欠」という。経営理念や哲学など「不易」を根底において、常に新しい売れ筋を発見していく「流行」が、会社の寿命を伸ばす。「会社の寿命は30年といわれているが、それは事業の寿命が30年ということ。会社を継続させ、繁栄させていくには常に新たな売れ筋を作っていかなければならない」。

経営理念や哲学が不易であるとしながらも、収益や商品力が会社を引っ張っていくものであり、どれだけ理念を掲げても収益を上げられなければ会社は生きていけないという厳しい現実。「運を命がけて掴み、それを育てていく。そうしてやっと運が宿る。激変するこの1,2年以内に準備を整えなければ時代に乗り遅れてしまう。とにかく動くべき」と熱く激を飛ばされた。



木野村氏自身、事業の柱である建設業に加えて、今年4月に完成した特別養護老人ホーム「樹の里」など福祉事業を新たにスタートさせた。

「人生の中で最後に、一番良かったと思っていた場所にした」と竣工式で木野村氏は想いを語った。豊かな心があふれている。定員70名は募集開始からすぐに埋まった。入居者の80%が地元の瀬戸市民である。その入居者たちを80名のスタッフで支えていく。竣工式での遠山塾主の言葉をお借りすれば「勇気と責任を感じている」。その覚悟がスタッフからも伝わってきた。

樹の里では環境面においても新たな取り組みをしている。それは一つのエネルギーから複数のエネルギーを同時に取り出す「ガスコージェネレーションシステム」だ。都市ガスを用いて自家発電し、その際に発生した廃熱を冷暖房や給湯などに利用していく。エネルギー効率約80%の省エネルギーシステムであり、CO2削減効果にもすぐれている。高齢化社会や環境保護など、今起こっている問題をチャンスと捉えて確実に活かしている。

さらにそれらの施設などを対象に行う給食事業などの新事業を展開していく予定だ。「どんどんアイデアが浮かんでくる」状態という。生まれたアイデアを次々と実現する行動力は、まさに時代の先頭を走る経営者そのものである。

「やる気、能力、人間関係の3つがそろって初めて成功の条件が整う。特に人間関係は重要だ。そこからよい情報が入ってくるから」と成功の条件を示された。

「川の流れに乗ればそのまま海まで行けるよ」。

激動する時代だからこそ、経営者が勇気、決断、そして行動をもって挑戦し続けなければいけないということを教えていただいた。また、それこそが経営者にとって不易の精神であることを感じた取材であった。

<第36塾 柴田裕二郎>

